

金碧画における箔の大きさと年代

源 豊 宗

金碧画は室町時代に始まった。日本独特の装飾的技法である。「善

隣国寶記」によると、応永九年（一四〇二）足利義満が明の国王に、金屏風を扇などと共に贈った事が見えている。それは恐らく一面に金箔を貼りつめたいわゆる金地に、彩画が施こされていたと思われるが、これは金屏風が当時すでに行はれていたことを物語る。しかし具体的に金地濃彩の障屏画の存在を示すのは、文明二年（一四七〇）の裏書をもつ堺市真宗寺の親鸞聖人伝絵掛幅に松の絵の金碧屏風が画かれているのが、管見では最も早い。その翌年に画かれた西本願寺常楽台の親鸞伝絵掛幅にも金碧屏風の画中画がある。更に文明十四年の藤原久信補写の慕婦繪第一巻には床の間の貼付や襖にも、松につつじなどを画いた室内の場面がある。恐らく十五世紀後半の東山時代に來ると金碧画が次第に行われてきたらしく思われる。（註）

（註）金碧画という語は、今日は普通に桃山時代に盛行した金地濃彩画、即ち金箔を一面に貼りつめた画面に、緑青・群青・朱などの岩絵具で彩色した絵画を謂うのである。しかし、本来は中国唐時代の、李思訓（六五二—七一六）が著色の山水を画くに「金碧を用ひて暉映す」と元の湯屋の「画鑒」に見えるように唐に始まるようである。それは一部に金泥を用いた彩色画と解せられ、金箔地に画かれた画面を

いうのではない。

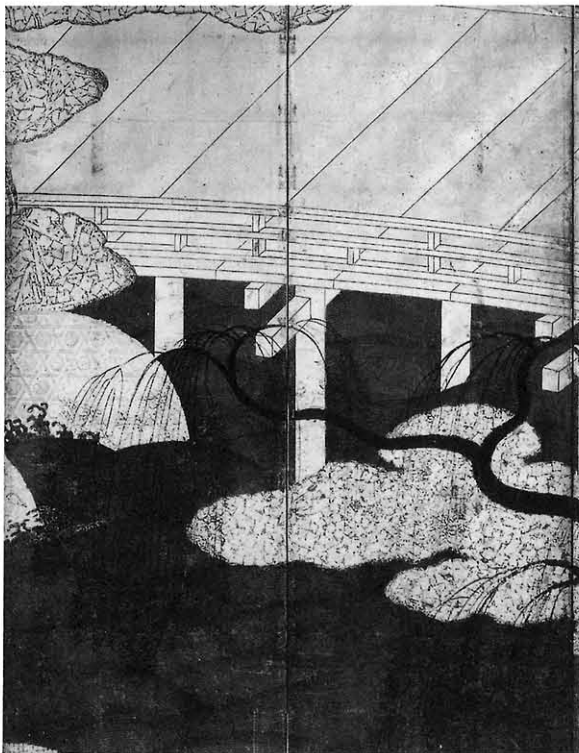
しかし金は当時にあつても貴重であつたから、必ずしもそれは広く行われなかつたと見える。河内の金剛寺の非常に意匠化された日月山水屏風は、やや小さく裂いた大きさも形も不揃の箔を散らして金地に代えている。既ち金箔の節約と思われる。この様な裂箔散らしは、室町末の屏風に屢々見る所である。いわゆる柳橋水車圖屏風は、その意匠の卓越している故に、そのレプリカは後世まで盛に作られている。しかしそのデザインは室町時代に溯る。この推定を裏付ける理由の一は、この柳橋水車屏風にはきまつて源氏雲が裂箔で表わされている点である。源氏雲は普通には全面金箔である。此の屏風には源氏雲と共にすや、霞も行われているが、その一双を貫ぬいて架かつている橋と、この霞とは、箔を貼りつめた金地である。

後に述べるように、その金箔の大きさがこの屏風の製作年代の推定に大きな意味をもつのであるが、今日知られる限りでは、京都国立博物館のそれが最も大きく三寸五分で、天正文祿の交の作と見られる。しかし此の屏風の源氏雲の裂箔使用は、そのオリジナルが更に室町時代に溯ることを物語っている。この裂箔は時と共に形式化して形が整い、その置き方も規則的となり、金剛寺の日月山水屏風に

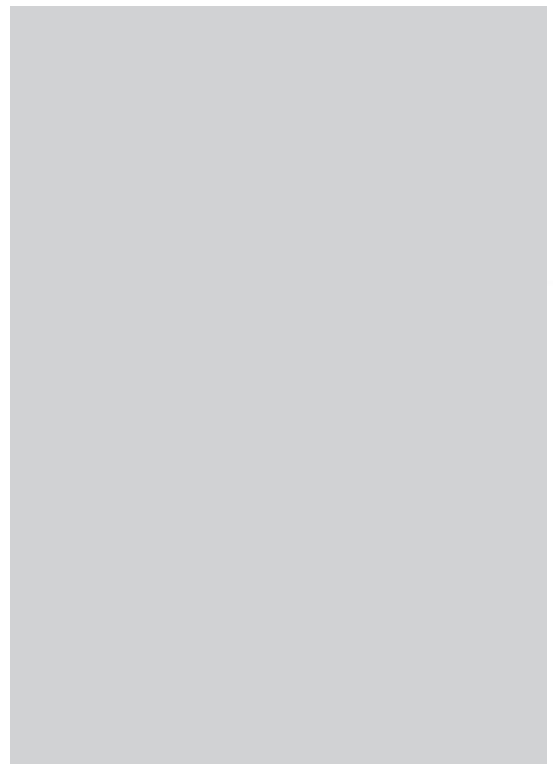
見られるような初期の自由さと粗荒性から遠ざかって行くのである。その点からいっても京都博物館の柳橋水車図は、比較的古様を保っているといえる。東京国立博物館の柳橋水車図屏風の箔は三寸四分で慶長期に入っている。

しかし室町時代も十六世紀になると金碧画の遺品も稀ではなくなってくる。その最も典型的な作例は天文十八年（一五四九）狩野元信の画いた四季花鳥図屏風（白鶴美術館）である。それは全面を金地とし、その上に更に源氏雲を表わし、これに右隻より左隻にかけて春・夏・秋・冬の様々な花鳥を画面に溢れんばかりに濃彩を以て画いている。今日遺っている金碧画で年代の明かな最も古い作品である。

ところが、この金地の金箔は年代によってその寸法が異なるのである。金箔の寸法はおおよそ三期に区別できる。第一期は室町から桃山時代関ヶ原役（一六〇〇）頃まで、第二期はその以後、一六五〇年頃まで。いわゆる慶長・寛永時代である。第三期、これに続く広い意味での元禄時代以後である。第一期は金箔の寸法の最も大きな時期で三寸五分以上。第二期は三寸三分の大きさが中心となる。第三期になると箔の寸法の規格が失われて全く野放しである。以上のように大きく三期に区分はしたが、第一期でも天正以前は、土佐光信作と伝えられる一五〇〇年前後の金地松図屏風（東京博物館）の箔は四寸二分の大きさをもち、前記元信の四季花鳥図屏風は三寸七分である。大体天文永禄の頃は三寸七分のようである。そして狩野永徳の時代即ち天正時代には三寸六分、天正を過ぎると三寸五分、例えば文禄初頭の作である智積院の襖絵は三寸五分である。だから第一期を細かく分ければ、ほぼ三つの時期が考えられる。しかし三寸五



挿図2 柳橋水車図（源氏雲の裂箔）
京都国立博物館



挿図1 日月山水図屏風（源氏雲の裂箔）
大阪・金剛寺

分以上である点で、そして様式的にも此の第一期の障屏画には共通した剛壮な作風が認められるので、一往これは大箔期としてまとめよう。(註)

(註) 箔の寸法を、尺貫法時代の物差で表現したのは、いうまでもなく箔の法量は日本古来の尺度で行われていたので、それに随った。箔は正方形であるが、その貼り方は、その縁を五・六ミリ重ねる。その重ねた部分を箔足はくあしという。箔はその重なった箔足を含めて計るのであるが、箔足の縁の部分は脆くて錯雑しているので、その点を考慮して計る必要がある。なお銀箔や青金の箔の寸法は殆どきまりが無い。

第二期は慶長五年(一六〇〇)の三井寺勸学院の襖絵にはじまると見てよい。その金箔は三寸四分となるが、慶長二〇年(一六一五)八五歳で歿した海北友松の晩年の作と考えられる金碧屏風は、妙心寺の梅と牡丹の屏風や御物の浜松屏風は三寸三分である。此の時期は大体は三寸三分であるが、大は三寸四分、小は二寸九分(船本洛中洛外図屏風)の幅の開きで行はれている。狩野山樂の作である大覚寺の牡丹の間の襖繪では、同じ画面に三寸四分、三寸三分、三寸一分五厘等相まじえて用いている。といつても三寸三分の箔が中心である。

第三期になると箔は、桃山以前の大きさが現われたりして、箔の標準が失われ、箔の大きさを作品の年代を考えることはできなくなるようであるが、それは又逆にその規格を失っているそのことに年代的な意味をもつともいえる。

次に比較的名な、及び資料的に重要な作品の金箔の寸法を上述の三期に別けてかかげることにする。それと共に俵屋工房、これを

伊年派として、その一派の箔の寸法は別に掲げる。慶長寛永期をその主なる活躍時代とした宗達や、その伊年を称した同時の門人達の作品に見られる箔の寸法は、一般の當時の箔を用いているが、宗達の息である宗雪の、今日遺存する金箔を用いた三点の作品は、何れも天正時代の大きさをもつ三寸六分の大箔である。宗雪は加賀藩の記録にも見えているように、彼は金沢に赴いて前田家に仕えたのであるが、金沢には前田家が天正十年加賀の領主に封せられた時、京都から箔打を招き寄せたと伝えられ、その天正箔の寸法が金沢にて継承せられ、それは今に至るまで続いて、その寸法は一〇センチ九ミリ即ち三寸六分である。したがって宗雪はそのいわゆる加賀箔を使ったのである。(註)

金沢では宗雪以来俵屋の伝統が栄え、俵屋独特の作風——光琳意識の強い琳派という言葉を避けて、これに代わるに私は伊年派という言葉を用いた——伊年派の作品が今は数多く遺っているが、その伊年派の宗雪以外の作品は必ずしもいわゆる加賀箔ではない。或は三寸六分の大箔は、前田家の独占であつたかという想像の餘地もある。そして恐らく儉約令による規制と覚しく、宗雪の息と思はれる相説——彼は喜多川相説と称したが晩年には款印に宗説、宗雪の字を用いている——は七十二歳という行年書きの作品があるように、その長寿の故もあつて、彼の遺品は最も多い。それにも拘わらず金地のものは極めて乏しく、唯一点を知り得るのみである。他は悉く素地である。

(註) 加賀箔については、金沢の石川縣立美術館の島崎丞氏「加賀・能登の伝統工芸あれこれ」の「金箔」の項に詳しい。

凡例

イ、年代の数字の上のcは大凡の記号

ロ、屏―屏風 障―襖

ハ、寸法が二種記されているのは同一画面に混用されていること

第一表 室町末―桃山前期

年代	筆者	作品	所在	箔寸法	備考
c一五〇	土佐光信	松図屏	東博	四・二	
c一五〇		日月山水屏	東博	四・一(右隻)、四・〇(左隻)	左右両隻異筆
一五九	狩野元信	四季花鳥屏	白鶴美	三・七	
c一五〇		源氏絵扇面貼交屏	細川家	三・七	
c一五〇		四季花鳥屏	サントリー美	三・七	
一五八	狩野松栄	四季花鳥屏	白鶴美	三・七	
c一五〇	狩野宗秀	四季花鳥屏	田万家	三・七	
c一五〇	狩野永徳	二十四孝図障	南禅寺	三・七	
一五四	源氏絵屏	洛中洛外屏	御物	三・七	
	秋草図屏		上杉家	三・六	
	檜図屏		御物	三・六	
	松鷹図屏		東博	三・六	
一五二	長谷川等伯	四季花鳥障	東京芸大	三・五	
c一五〇	狩野光信	四季花鳥屏	智積院	三・五	
c一五〇		柿柚子屏	佐野家	三・五	
c一五〇		柳橋水車屏	西教寺	三・五	
c一五〇		四季篋図屏	京博	三・五	
			高台寺	三・五	
					永徳印

第二表 桃山後期―寛永時代

年代	筆者	作品	所在	箔寸法	備考
一六〇	狩野光信	四季花鳥障	勸学院	三・四	
	海北友松	桜牡丹屏	妙心寺	三・四	
	〃	浜松図屏	御物	三・三	
	〃	琴棋書画屏	妙心寺	三・三	
	狩野興以	日月梅松屏	ホノルルアカデミーオブアーツ	三・二	
	狩野山楽	絵馬	妙法院	三・〇	修理光頼落款
	〃	紅梅障	大覚寺	三・四、三・三	
一六三	〃	牡丹障	〃	三・四、三・三	
〃	〃	竹虎障	天球院	三・三、三・二	
一六六	狩野探幽	池畔紅梅障	〃	三・四	
〃	〃	松に孔雀障	二條城	三・三	
〃	狩野派	柳鷺障	〃	三・三	
一六七	〃	菊籬障	〃	三・三	
一六八	狩野尚信	梅樹障	知恩院	三・三	
c一六四	狩野内膳	豊国祭礼図屏	豊国神社	三・三	
	岩佐勝以	船木洛中洛外屏	東博	二・九	大坂落城以前
		彦根屏風	井伊家	三・〇	寛永期
		松浦屏風	大和文華館	二・九	
		誰が袖屏風	福田家	三・三	
		秋草屏風	後藤家	三・四、三・二	
		源氏絵屏	〃	三・三	
	土佐光吉	東博本柳橋水車屏	東博	三・四	慶長期

伊年派

年代	筆者	作品	所在	箔寸法	備考
元禄以降	伊年E 伊年F 尾形光琳	茄蔬図屏 太公望図屏 紅白梅屏	大和文華館 大倉集古館 京博 MOA美術館	三・五 四・三 二・九 三・四、三・六	宗雪の息と推定される
伊年相説	伊年D 伊年C 伊年B 伊年A	盛菊図屏 芥子図屏 武蔵野屏 秋の花弁障	金沢某家 大谷派金沢別院 金沢某家 出光美 京博	三・一 三・一 三・一 三・一 三・六 三・六 三・六 三・六	玉城家旧蔵 伊年Aと同じか
俵屋宗達	俵屋宗雪	風神雷神屏 関屋濤標屏 舞楽図屏 松図障 源氏絵屏 萬の細道屏 秋草図屏 群鶴図屏 萩兔図屏	建仁寺 静嘉堂 醍醐寺 養源院 熊谷家 万野家 東博 金沢某家 金沢某家	三・二 三・二、三・一 三・三 三・三、三・三、三・一 三・一 三・一 三・六 三・六 三・六 三・六	加賀箔使用 〃 〃

元禄時代以後

年代	筆者	作品	所在	箔寸法	備考
	狩野岑信	花鳥図屏	大徳寺	三・八	岑信も周信も
	狩野周信	花鳥図屏	大徳寺	三・八	元禄時代時代
	狩野永納	花鳥図屏	ボストン美	三・五	を活動期とす
	田山應挙	藤図屏	根津美	三・九	
	〃	三保松原屏	鴻池家	三・一	
	田山應立	竹障	西本願寺	三・五	
	松村景文	花鳥屏	某家	三・三	
	酒井抱一	花鳥屏	某家	三・四	